

2017年5月

設立趣意書
エッジプラットフォームコンソーシアム
(Edge Platform Consortium : EPFC)

経済や社会はエネルギーの安定的な確保、超高齢化・人口減少社会への対応、産業競争力、地域活力の向上などが課題であり、ICT技術の革新なしに社会課題を解決することは難しい。特に産業界では、少子高齢化に伴う労働力人口減少対策や生産性の改善が急務であり、ICTへの期待は大きい。ICTの革新は、IoTを生み、IoTの普及がもたらす社会の変化は新たな産業革命と言われる大きな変化になる。

IoTは、身近に溢れる各種の事象（データ）が情報化され、その情報から新しい価値を生み出す仕組みであり、その価値が新しい社会を生み出す。このIoTの仕組みを構築するため、システムインテグレータから、アプリケーションソフトの開発、ネットワークシステムの構築、データ収集端末の開発など、様々な分野の多くのプレーヤが関わっている。この様に、様々なプレーヤの連携・協働が必要になるため、現在、産業界を横断する標準化の動きやプラットフォーム構築による囲い込みなどが積極的に行われている。

IoTの世界では、様々なデータが生み出される現場とそれらデータを処理し価値化するサイバー空間とをネットワークを通して効率的につなぐとともにセキュリティや情報保護への対策が重要になる。今後は、リアルタイム性、データのセキュリティ、通信トラフィック等の課題解決のためにクラウドを元にしたデータセンタでの集中処理から、現場近くでの自律分散処理への動きが加速化される。一方で、新しい価値の創出はデータセンタだけで生み出されるものでなく、質の高いデータを現場から集めることが重要であり、現場に立脚したデータ収集と価値化に向けた仕組みを用意しなくてはならない。現場に立脚した仕組みに求められるものは、多種多様な現場・条件にあわせた仕組みであり、一つ一つがカスタマイズされたものになる可能性が高い。このような状況はIoTの普及・展開を阻害するものとなるため、共通化を意識したプラットフォームで仕組みを構築することが必要になる。

今回設立を企図するエッジプラットフォームコンソーシアムは、現場の課題解決の仕組みがIoT普及の妨げにならないようにするためのプラットフォーム構築を目指すものである。エッジプラットフォームでは各種現場の課題を解決するIoTシステム端末の構成、設置を容易にする標準的仕様を定義・構築する。エッジプラットフォーム準拠の仕様が普及すれば、IoTシステムを構成する部品供給側（シーズ）と部品購入側（ニーズ）の間での仕様の擦り合わせや仕組み構築の手間が大きく改善される。

上記目的に賛同するシーズ側とニーズ側が連携・協働してエッジプラットフォーム構築を目指すエッジプラットフォームコンソーシアム（EPFC）を設立する。現場の各種データ収集の仕組み構築における、ニーズ側の各種環境やシーズ側の提供部品の仕様最適化、

課題解決の最適手段模索や必要な部品の探索などについて、相互に理解を深め、研究する場を用意することで連携を図る。エッジプラットフォームの普及は多様なセンサー群や周辺機能部品群を作る数多くの企業の市場参入障壁を低くし、IoTシステムを導入する現場企業の負担を大きく軽減することになる。

EPFCは来るべきIoT時代に向けて、IoTシステムの普及・促進の基盤となるエッジプラットフォームを構築することで、実用的なIoTシステムの構築と現場の課題の早期解決、新しい価値の創造に貢献するために多くの参加者と連携しながら、産業界のより一層の発展と世界に通用するエッジプラットフォームを構築することに挑戦します。

上記目的達成のためにEPFCでは、以下を行います。

- ・ 事業現場のニーズと課題を解決するエッジシステムを構成するシーズ技術のマッチング
- ・ エッジシステム開発のための基盤整備。具体的には、以下を実施。
 - エッジシステムの基本要件の定義
 - リファレンスモデルによる実証試験・効果検証
 - エッジプラットフォームの要件定義・構築
- ・ 産官学連携プロジェクト提案や同プロジェクトへの参加の支援
- ・ エッジシステムの普及・促進のための各種提言や情報の発信

2017年5月

設立発起人代表

国立大学法人 東京工業大学

科学技術創成研究院 研究院長・教授

益 一哉

株式会社デバイス&システム・プラットフォーム開発センター

代表取締役会長

齋藤昇三